深情俚言 教訓女今川

禮

特
へ 13
1825
3

深情俚諺 女今川巻之三

第八回

夫ハさておき本町なるハ次男に本番後につのり今で
ハ身代も殊の外六ヶ處親類も与八お姉さんの跡を継
みる一向手もつけずおきし思ひおまさにあふ二十
地面もそろく汲れるにふす思ひ伯母のおらくハ気も
むならず苦労にしらくいれどもおまさハ少しも構はず
とうくも浮世をと捨し我身なるまじバ今金銀衣服も何も

松下水流處藏書

特 門 へ 13 號 1825 巻 3

よいよふけまさるがよいと言ふくさんじやくせきも夜次郎が
夏のことゝ思へども男家の入江子息ふさまのせわで今ハ謀
の坊主きてどうふうく病家も次第に減じてくらうく白
を送り夜次郎が所へハ芸者の浮ハ礼まも出このまで伯
母さんぞへうりやくちつとも出あわず思ひ切る様子
こハ志らぬおめんハ一ト筋ニ夜次郎がいふのも道理なら
称どおまきをあの後程おひくハ我身の今の身のこ
まくハなくてず何卒二人を引つれくと仏をたのしみ交

おまきを呼まやまでども何のまかとつけまぬ出そそぶ
のこふのと薬しらま夜次郎ハ夕ア淮南堂の狸お
の金があつて夜ごの女ことふ身まく第二田の出雑
ま縞縞のかいまきを引かけ様妊へ出てう
おびをしくいるおめんハたゞこゝを走り付てやらおご
へモシ旦那へおまきさんハいつて呼までも芸者のまく
数出しもせずで為をあげても遊ぶもなし日ごで計り
ぶふしてそんでこきいます称へハうつちやつてをきなせへ

先達おまへのいつて呉なさるの事ねへおふくろの仕方が
禅へ早ふ（夜）それハなんでもおまへせうのおかみさんもいち
づくをやめらく私の一生の相談ひとつおたのみますからぞ
おかみさんと此夫婦になつてくださいまし（夜）てあゝ返しが
そんな事馬鹿な事をいふ一旦こうしてそのをどふし
くマア女房にされるあの（姉）へそれでもすくんだ様子
きるやらなあるくおきますからぞふぞで付度おとのくあいへ
くださいましどふでもおいやとおつしやると私ハ死ん

でしまひますよおかみさんをお悔と成ぬと氣の毒
ませんからあなたの御世話になつて居るのこぎハ外
（夜）居まいいなら居禅のいつ何もおかみさんのいる内はめへ
を囲つてといふぐハなしそれがほんの及ばぬの世話と
いふものハモウくよしにしてこれやらまいいやさくトはさ
女房らしれくいる所へ伯母ハ何の若号そこへな顔をして来る子おかみハ見てとり（姉）コヤ此新造さん何だ
おかしな顔をしてございますよおかみさんハどふなさい
ましたへいつて呼子ふましても付返でハさうなおいつぐ

なさいませんから弟子なりますよ　梅さんモウ何で
お私の不調法さてまぬ事でござりいますからあなた
の御年性を御見受申く御不調法をおつりとふそうと
お顔ひま気りましたおかみさんどふぞお顔こやま
さよ　何の御用でござりませんかマア旦那様おつやさ
とごろふじまよ　外の事でもございませんお寺町
の縁さ深くおかみさんのお世話しる私も婦く勤めの
梅次郎さんと申す者を付目芸者の入り子お呼びふせ

様子をつくりいたしまして私も若い時には兄と後替
母とい不子年だける返田舎でそだちましたか
おかみさの縁組も何も志らずいましたその五年あの
子の病気であちこちも出入さすやうになりました
深い訳は志らずに居ましたその呼けば吟様梅さんの
思召も御尤なれど家の私をよく呼んで下さいましアノ
おかみさんはあんな年のよいは生まれ先祖の後も次第
くま人手まかしくしれば技での立てこのなしいやら

おまさこのあたりと夫婦に
なつて居たらあのやうな
真もあるまいしかしハやかましき
に姉自害まいさせぬと洞
ぐらいけ最寺所へとまる事
ぐまいりましたがの二人で我
後をして家内ハ仮くなと
ろへ居せバ居る程おもくぞ

ごく/\いやになりますから
早く内へかへりましてぶで
おまさとお後をしてえの
よふに志く/\立度ぞ物も
とりあへずかへつて見ました
所がマアおかみさん嘆いて下
さいまし　アノおまさハ備前へ
まいつてお持仏さまの前で

涙をこぼして居ますから私も又久しいとのごとの
ぞいて見ましたら坊主子なりといつて何か書た物を
手道具でもなんでも一つに紙に包んで川へ流
せと忠右衛門に言付て置ましたものこらず一ツ所にまろめ
てそれもいつよふにしてくれろと言付て残した物ハ
白無垢が一つ二つ獨りで結つた事もない髪をほ
といてはさんで手切りにかゝる所へ私が参りましたら諫て
ぞつくりと泣てあまりあきれて物もいはず其れから孫

二階に綿入物をきて居ておのれのおびを解て嘆きさ
所でのお梶もきものをつかんでしてモウくぞふ出よふのと言ひ
ましたよそれから涙で泣を咬ましたら孫さんと夫婦
になされず仰に夫ハそうでぬと申されから其れ程迄に思ふ
ならどふでも志てやろふと申ましたら此方あなたのお
出しに男と生のおつしやりのうへ嫁へ此のよふに思つても
逃もされぬから死で志まふといひ称からお梶におまさ
をたのんで其今後此事をお出しやうに条り済した

おぬいさんどふぞたまげると思ひどふぞもあなたさに
お頼け申升からいひよふに志て下さいまし 蔵さんも
さぞおいやでもあろふけれどおまさもマアよくの事
てござります 織町からくつくこのうちの倅 振袖の兄弟
をつけて一度も出してみてこともなく人の居ぬおりハ泣
て計り其を私いぞんじませんで急薬よ汁よと世話を
やきし信心をしていのらぬ神もない程にあるのも今でハ
無益といふハ私とおまさがこのり米本町に銀倍といふ家が

兄の忘れがたみなれど今の与八とおぬいの振子にて
ハ何ぞのなんぞこの忘れませずさまれハおまさが大切さぶ
ぞ病気をなをして息災にしてくと思ふ願ひがふく
かなつて此宮芝居へ行く時からきげんもよく私も落
付ス しばらくけさハ本町へ参りましてこの度の事をせつら
ぞふも薬してしてもらつてみると今の伝蔵さんおぶん
さんぞふ志てこのあふやらお二人どふぞいよふにして
下さいまし ト涙ながらに二人に向ひ手を合して泣む

母へおめんハ猶さらいぢらしく思ひ〽私も大方さんな
夏ぐあろふと今も其返事取て色〻詫をかしく承りまし
たモウお菓子など進さい弥な今子らけ〻く私のごうふぞ吻夫婦ま
おなり推ずすよふすよいたし弥よ〽エてモウそれハおそのふござい
ますよ〽モシ旦那アノ通りのあられな縁合由恩私か夏も
ちつとハお宿推ばしても罰ハあたりそふもないおぐござい
ますよ〽何もおまきをいやがるの嫌ふのといふ訳ハござい
やせんから何がさて丈夫子私の心ふなけちなやろふを見

といふもよく〻深い縁のそのござゐませうらふでも
いひよふにいたしませう　私も色〻とさとめましたが丈夫の
夏ぐあろふとハ思ひませんたさ子おまへ旦那も其苦労を
かけました〽旦那へ気の毒でござい弥よ又一寸のの口をお
つきやると叶ませんよ殊へ此新造さん〽ハイサモウ其お詞
違ひなくバ今宵おまきをこなさへ上弥らおめんさん
どふぞいひよふ千志さく下さいまの　二世迄もと思ひ結ぐお
出なさるおめんさんへこふ立明らく　あたのくや私がおやの門

ママどのやうなおきの毒らく夜さん御推量なされて下さりませ
もきくせの縁と思召て下さりませ〽（めうれん）何のそんな事気の毒
な事ハちつともございません私が急度お受合申ましたよ
〽（夜）なまき私も又ふいひ出すらいにたとへどのやうな事が
ありふとも決してお言葉ハ違へませんから御案し下さいますな
〽（おもと）ハイ／＼それハありがたふございますそんならおめうれんさん〽（めうれん）おし
もお案じなされずと早くおかへりなされて／＼おまへさんを
おまちかねなさいます旦那のお伺の趣を如内のよふございます

〽（おもと）ヤレ／＼嬉しや／＼おまきもさぞ嬉しう思ひませふ〽（めうれん）此
新造さんちつとも早く〽（夜）ハテせわしない〽（おもと）おめうれんさん夫
ならふございます下伯母ハよろこびいそ／＼と立かへり漸く
おまきをとつくといひふくめ色／＼手だてを尽しましてそれで
むりにでもおまきハなんぞれ出家する事を得心させ
こまりきつて振る所へおめうれんハ身を手を遣ひ手をもつて
おらくおめうれんと無理にめくめく連て行ておまきハ一向
にも泣ずでおめうれんのそばにさしうつむいて夜次郎が方ハ

見向もせで見限るをあしらふすなる梅次郎ハ浪之伯
母のたのもしげのなく又ハおまきの深切も可愛そふに
なるもおめんが公の用ハさぞ面白くもおかしくもあるまいと
浮世の義理に詮方なく色々二人が中を取持公の用
いづれを何れと語の様な同じく無言にて目を拭ひ
つらく思ふにまでしなけれバおめんハちもとつたく二人が
口をきいて思ふおまきさんへお互さんといふわけもあん
まり情なしだ様へあれ程私が公の用を明してどふぞ

旦那と夫婦にしてあげふと公をくどく程人に語
も皆ずに尻になるの死ぬのとおつしやるハそうしてへつら
あらくの但し旦那へつらあらくの何ぶつきつめておびうても
あんまりなぐさみますよまあ旦那も旦那でござい升
けるなかなか歳月中の志もしませんで意地の強いも大
概おなくそのやうでございます何ぐもこちらハお二人がお中
よく御夫婦になりあそばしてくださいませんと私ハ死
ぐ志まひますサア旦那へ御返事次第で命ハおしくま

せぬと義理と辞るのお嫋んの詞情躬りこは志れけり

第九回

菊次郎ハお嫋んの詞を無理とハ咲縁ど己ぎと気強く
［菊］「おぬへ嫋ら好ぐハなんのおまさも女房と夫婦まなら
接へとむく死ぬもおういい［嫋］「おかいい所でハありませんよ下
素をふ子あのよふ子まぐのかくちもおところつく十六や
十七の處女を見せも世子で浮世を捨る此の内人百の度
をこのぶつく辰るとのぞふ志くマア見ぐいくわるとの

何ぐも今宵の内子祝言をしてくださいまし ぞふぞお
がてまするよ［菊］「志まいとハ旦ねへの今そんなこ急のぎずとも
いひ志やアねへの［嫋］「そまでも私ハなんぼこの気の済ません
から急爰ゑきあくそれからお内へお帰ばすのハいつ
ぐもよひじやアありませんか［菊］「マアどふでもいひやうな事
鼓へ命を出さずとも此処よやこのまいいだアさあぐ
おまさもそんなおふうつむいて計居ずとも嘶しぐも志
なせへ［ます］「ハイトいつてぞのりあく菊次郎が方へハちつとも

むこのず子孫る当惑梅次郎ハ恥かしがるのでと気をきき
こせ囲いへいつて炉の炭を直している娘子ハお婦んと
さしむかいまお婦んさんへあなたのやうな深切なお方ハ
ありがたいございませんほんたうのことでございますこの梅
次郎さんと夫婦になりますことハいやでございますから
どふぞモウあんなお世話をなされてくださいますなモシ
お婦さんおまへハ本気かへアイいやそふあきれて
それでハよろしくへ子貰をおゆらしく漸く見取も承知で
嘆しがりなさるだらうと思ひの外いやだといふ
ことハなら死ぬの坊主になるのなんのといつて粋な娘
の夏ハありそうもないねぞ折角よつての心をとらした
深切を無子になさるかへそふでハございませうがあん
まり残念でございますへ残念がりなさるのハ仕合でありま
すよけふ迄一日なりとも梅さんと傍へあなたの中継
ちよく一所に孫なく死んでも恨ミハあるまいと思わぬ
恨むまじき人迄もまつ思ひろうして子心をなやまし

たゞのモウ今でハなぜあんなきのないに氣ぐあつて
のと思ひますよトロでいふと女子ハ思ひまあまる貝子
洞見せぬと神子つみ悪たる女の門さら〳〵ましと
そら知ひおかんハ去の実に夜を立「イヤモウあんまりだ
物をいふも悔しいぞふぐも独りまするでいゝト氣強く
いへど志りよくあまし種とゞれぬ紫ふ種思ふ女で今
文子裏を之しよふ子いふのも何ぞ很のかたふ女さ
と氣をつくれバ目る種かまふずやもおのもしずとつかいつ

独り氣をもみ居る内に萩次郎ハ何もしらずに立出て
「おかん湯のよくたぎつているにおまへさんを客らしく初
昔をおかみさまいやおいて菓子ハ何ぞおこの落ことりでも
うまいのでもいゝ仲町のきんつばのおかしに出しなせへ
「ハイそういへどおまへさんの様子がどふもまとのずにとろ〳〵した見
まちみまで居る内萩次郎ハおかんの通人らしくおまへさ
をそ持ハせりをつくも女の深ましく悋気の角を
おこしたとそびらくもつとしくらんしやくをおこします内悪

菊次郎も大きに彼を立 菊「おめんなぜぶつくさとして
居るのだ言事があるなら為度いふがいゝひな事まで
のあづきらの瓶の中へ落し飯つぶのよふ子るくぬく
ぶつくと面白くも無へ薬もよせく志無へやぐ
めん「何もやいたしませんサアおまきさん圍へお出なせよ
まき「私ハ江克なされくださいまし モウ立りま去やうト云あ
おり菊次郎へハ一向挨拶もせずおめんさんいふくおり
がらふこざいます江縁もあくが又お目にかゝりませず其

もござゐますしやうト立上る袖にハお婦んあきれまで
あつけにとられて茫然としていたる藤次郎ハお婦んが
おまきに何かいつて出る様子を立て返りしところへ
おむずくつんとして独り国へ出てお婦んハ心の中にてほ
ま様も何とかふぎ言の悪ふもうらがれて出て庭も
せの梢も冬の雪にぬれふくもあるなどとつく様子と
しく来る処へ伯母ハあきれたしくうけ声にてお婦んか
いそぎつかしく　伯母さんへマア私ハ今急ふべきといひ

また　お婦んさん呼で下さいまし　おまきハどふいふ
志まいたらあなたらかへりますと若ゐら本町へぜひ
ゆくと申すからお先にいやだといふて来たら返せ
急に行のごと申たら是非やつてくれろと申すからどふ
も合点の出来ぬ出へ急病にて申にて承りましたがどふ
いたしませう　お婦ん　新造さんへおまきさんハマア本気でハ
ありませんよさつき旦那も承知で今宵すぎつとお
目出度据ゑておやゐもこしらへ旦那も機嫌よく

国へ参まして親く何度も尤く網が来てもおまきさんの
おつしやるには私が御切に世話をしては嬉しいが夜次郎
さまと夫婦になる事はいやだとおつしやるゆへ国郷には
物も言はずにお入りなされつらう私もあきれまして物が
いはれませんよ〳〵ぶしたのじやらお梶に云ひつけて呼せまし
たやら ト新しているのを夜次郎は仰天して見るには何ぞ様子のある事と志
らぬ顔をして居る新らしくおまきは何か息子を市町へ行
よく支度をそこ〳〵まして伯母の入りをまつて居る
居るお梶は何も様子を志らぬ思ひで支度をしている〳〵おまきさんお船で
お出被成ずに〳〵あるひて行よ〳〵ぶしく市町迄そんな
ぶらしたお形でお出る物がござゐませぬこのト あら〳〵て居る
西ハ伯母ハ おそ
気が来り〳〵お梶や何をさしてるのだ〳〵市町へお出被成ますとおつし
やいますから〳〵ぶしく市町へ七ッ過ぎでござふあつて其
せへ〳〵さやうでございます今日のよふでござゐますおまきさ
んそく被成せ〳〵アイ〳〵コレ梶や家後二階へ往てや トつれて行きにき
何でもおまきが包子一箱あるだらうあれをもつて来てくれるとたのむお梶
はのこゝみおまきが其処へ来て其処で出しやあるとまう出し〳〵なかうこのつゞく
〳〵おまきさん〳〵表裏云の草樹木日孝は冬つぽと面白ふ
ござゐました操へ猶猶の八重垣姫の御切なとあ〳〵れん

ご思ふ所ごの様子情ごのあつてよふござりいますて禅へアノ
八重垣姫ごの勝頼ハ腹を切つて死んだと思ひつめ回向して
居る所へほんの勝頼ごの入こんで謙信の家来となつて
上下を着て出たのを見てそれハ八重垣姫が絵姿を
見競べてまつたり嬉しのつて居るきざのかはゆらしさ
それらハそれこよつて色くな事をいふところごの紫蔵ごの
よふござりいますて禅へあなたハあれをごろふじてハいつてかむ
づかしよふまへうそやへうそもおつしい八重垣姫がいつてうそひ

そうだとおつしやいますてでハござりいませんへそうさあの
時ハそふ思つてござ今でハなんともおもハないよ何のこつたのハ命
子長い浮世従子たらぬ事子色を尽させといふハ了んするの廉
らしいやらごのふへあなたハぶんごに情ありをなり抱かいなれ禅
へなぜへそれだぐもあんなこ子ごの道了簡お藤さんと夏婦子お
なりなさる事をいやごとおつしやつてハきてみませんてハ
ござりいませんへいやごはそのをへ今ても死ぬよふまこだれ
た人をそんなこ子いやまおなり抱ずすといふハよくく情なし

ようございますよ情なしとてもいよいよよくハございません
マア兄者へもごらん遊ばせ彼をお立なされそうなお姉ん
さんの身になって藤次郎さんの心を推し漸く承知も
やう〳〵晴しやと伊新造さんもあんど遊ばすと又あなたがや
だとおっしゃるのハほんにまアよっぽど天の邪鬼でござい升
さきほどいやがる時にハ死ぬ程こがれてそれならどふで
も志よふと言ふと嫌じゃとおっしゃるのハ何ぞ様子がござい
ますかお話し遊ばせ何も訳ハないのだいやじゃよ夫婦
道にいやな人をなぜ又あんなにお志たひ遊ばしての
くらひなら今と成さぬと夫婦におなりあそばせハ本
町も今のようにハ御身さまもむづかしくハなりません藤次郎
さんと夫婦になるもいや外の人を聟にするハなをいや
そふしてマア一生どふなされますどふ志てもいゝのさつ
ちやつくさくさしてお居で日陰に似合ぬあなたのお心私ハ薬
ドらましく外の人にハお隠し遊ばすとも私へおっしゃし遊ばす
夫ハあんまりふなしい悪うございますあなたのお仕合が

よけれバ私もとも〴〵およろこび申それゆゑ私へ深く
お隠しなさいまするハあんまり合点のまいりませんたとへ
どのやうな事でもあなたのおためになりませぬ事を
いたすやうな事ハございませんから若さんのいやがおなり
様ハ〻訳をどふぞお聞し様が世へ何も訳ハないよたゞ
いやぢやいやぢやばかりおいひなさるならよふござゐます私の
母の遺言でお若さんハ御新造さまのお乳をあげて
育てると御丈夫で育つと御隠居さまがおつしやるゆゑ

お乳ハおかゝさまのをあげて私の母ハ年をとつて
居る事ゆゑおもり役私が七ツの年よりまゐつて来つて居る
とお若さんと同じよふにたべおちらき御新造御隠居さま
のお目をおかけなされて何不自由なくけつこうな事
ばかりの親子のうけし御恩ハ命を捨るとてもあきたら
ぬ程な事なれバお若さんが御縁付遊バして御子様
でも出来る迄ハお付申しておるよふにと思へども中付まし
たゞ何のお役にもたゝぬ私なれどこふして今におつき申て

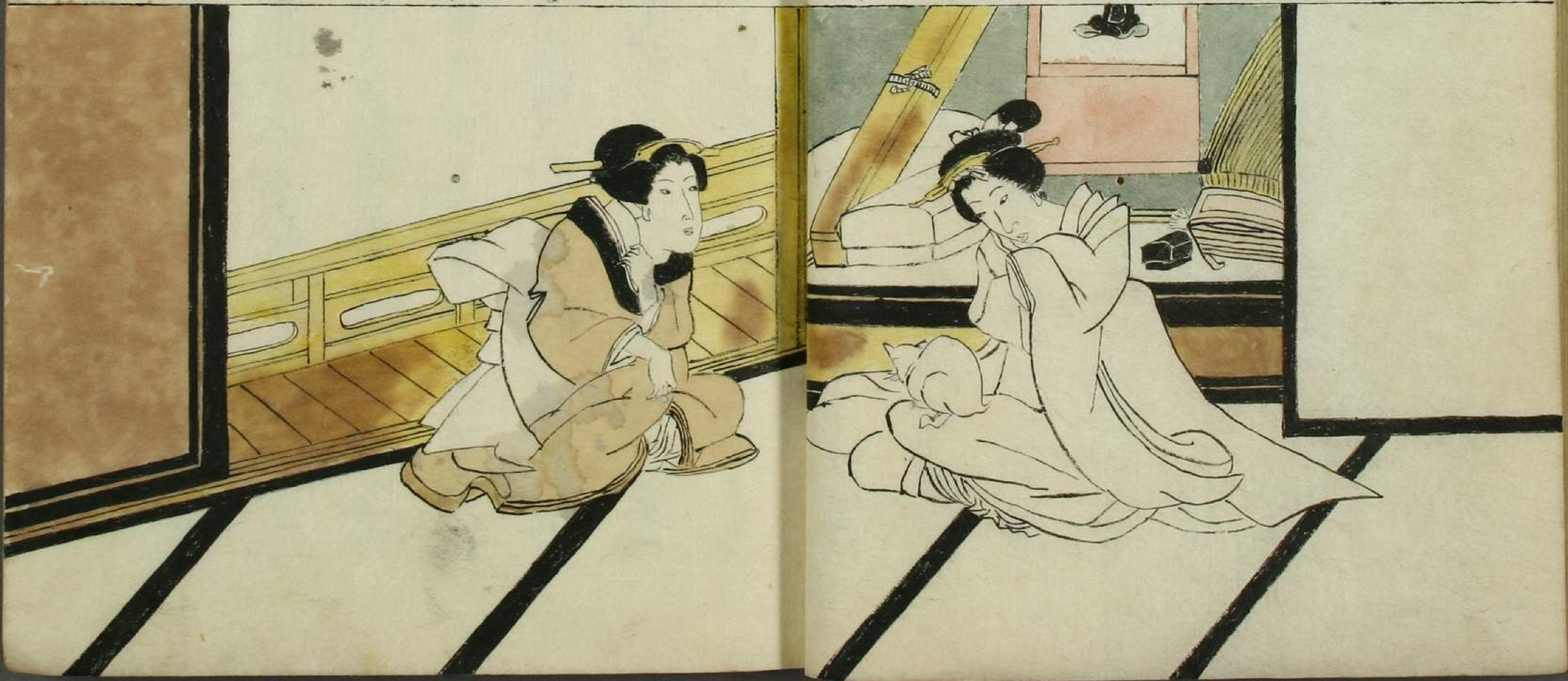
おりますその一包にはこのげやらあまた種な四病と氣を淋
くによくしてやまと嘆しやと思ふ門今宵又茂治郎さまの
お心もおれよろこびによろこびを重ねて嶽重にもお中
よく行末ながくお弟へ挨ずすならばさぞ嘆しのふとぞ
んじますにあなたはお弟ごくも遠ひいいたしませんにまけぞ苦
たのいやる夏はこんなむじやその迷ひの迷がわれて見れば
無い人も憎い人もないぞこぼえて是程迄にてもお哀れ
なくそんなに私にお隠し挨ずすならどふぞお役には

たゝぬさきくございますらモウ〳〵何にも申ませんぞで
私はおいとまをいたゞきまして宿へ下りますから緒に
に挨ばしますトおどきにされてまき權や佐恵しくおこれより下の公
の門をさし泣しく咲せるからかならず伯母さんにもだれにも
悲しんなよ一生人にいはまいとおもつてゐたがそなたの深切にや
るのを云にきゝあふぐきるいから咄ますの急度だれにもや
るなよぞぶいたしましてぞなたにも申ませんからお咄し
挨ずせまきアノ是たしこの子夜るでも書でも寢くさへいると

麹町のおかさんが事らくいつそころひ殺ぐ旦那の事を
思ひきれ〳〵とせめる上へ其時にハ今しいらぬ復うつゝに思
ひ切つて志まおふと思ふて思へハ何だか悪ひかいつくりしも目が
さめつくすると いつぞも見なる通り冷汗ながびつ志より
かいて居る上へ思ひのましく梅次郎さんの事を思ふ
のもやつぱり因果と思ひ出しくけれどもさうでない
切られいに夏中も見ぞて病気も十日の廿日のあいぶ
まこんなふによくなつてからモウ〳〵いつそころつくなら
ないよそくも梅さんとハそゝられぬ縁ぐあるながら義理
まさるふと思ふ上へおゆんさんにまでいろ〳〵心配をさ
せやがる人を義理やりにうらみをうけさせそひとげ
くらぶのそしや行末梅次郎さんにまでどんなうき
目をみらんあろがすよふな事のあつくいなくぬまゐ
私のいのちハおしまぬ様でも梅さんのおためになれず深
切なおゆんさんの心の内をさつしくみれバずぶしく
夫婦になられるそのゝのそれをあのつくいふ時ハおさん

この方でも浮名がたち立
梅次郎さまの邪魔にも立
るし、おぶんさんのお気性
ではそこの底迄呑込だし
おまへさんの事はうちやつて
お前もなされまいし、そふ
見れば方々このひろうが髪
なつてまるひらきさへ

思ひ切ればどこぞ根にも
むくひもなし、おぶんさんへも
義理が立ち又いやがらんす
梅さんもうるさく思ひまい
と思ひ切つたら心も晴て
今迄逢ふ執着の根にも
さつぱり志てよふござんす涙く
の噂しを度おのが泪



の目を隠し内のお世話もきけハ嘸おいとしい
やらかなしいやら志のおさんどんの落をとろふじるハ若
くあなたの御息子たつ思つて御出扨ずすむへござい
升ふさんな事ハうちやつて御仕舞扨バしなんでも
若さんと夫婦におなりなさいまし・内それでもいふも私
の弟子海ぬおばんさんの誹のお息子競てすれハ私
の影だらけたとへば仮死んでもいひらう若さんと夫婦
ま〻いなもまぬよ内それでハおばんさんの心ざしを泣まする

どおり内是れしハ又おばんさんへ義理の立と思ふよ内それ
どもおばんさんのそんならいふもとそれぎりまず志くく無も
なきるまいぞふもこまつてあぶ内それぞから伯母さんも
ごふぞたまつて居なよ内ハイトハいへと志あんにこうくれいッ
のうくそうくにあきらめて居るおまさの胸をおあの
されお梶ハ何と詮方なくなぐさめる術くとろ泉
泪をぬぐふぞこのりなり

第拾回

されば菊次郎ハおぬいが古きめでよくおまきと夫婦中ならべき新町の
様もなくてえのごとくすみやらんと麹町へ行菊次郎ハ父へだん／＼相
談なしけれども元ハ常の商家をつぶしたるハ今日の意たぬ身へ今は新町へ
行のよひといふてそれより新町へ来り與八ニ向ひ渡く志めくりをなせし
所あんのごとく上方の金も取ると與八が志てしよみしからず地面も人手ニ渡
たせしハつまりおく與八が寺より継井まさが拾てせんとのそくろこあ
らされけれバ菊次郎ハ新町ニ志ばらく逗留して家内の私志めをなす銀次
郎ハ家母を待亀井戸の伯母ならくが方へ引取らせおぬいも與八ニハいさま
をつゝみし おぬいハ銀次郎といふ子もありて身をきるひ科とて一ヶ月ニ七両
ニ銀八抱抱て手当を遣りまた中へなくなくバふのおよびと底もなきけれ
こそりしひかさまでのおぬいもなんともふ是なくさそじく与太八つてニ
手前の家へ行けり扨又與八を呼で深く今迄不埒の段を云ひ聞せ今
までの世話引取よふてといふて渡し忠蔵ハかるきそのみハめづらしき忠義
そのうるむつの忠身ニ上の中ニ年の都る迄人手も放さ廉されたれども
まきを大切ニ思ひ亀井戸迄の付そひ昔から勤し夫婦へ是も入分
一世話の身代ニても紫隠居なさせ忠蔵が隣日町の何某やニて勤

いさりしたことひらけたく与八が締役を仰付お梶を女房ニそへて世悪人ハ
のこらずいとまをつかはし 跡迄深切ニつとめし者のハそのまゝおぬいまで
もおまきまでも子の出来しを麹町へやりて菊次郎が内の後見をさせける
つぎりおく菊次郎ハまづ商ひを本町ニいさりける志こつる子いこのむかし支度や
らおまきハそのくニ菊次郎をきるゝ身へ伯母ハまたく名をいさあおぬいを
亀の毒なりつゝ亀井戸より呼よせ菊次郎が麹町へ行しをさいはひお梶
と二人しておまきなどへおぬいさんへおまへさんもあんなニ昔をお
さまさせめる
つとく菊次郎さんの身もおれ男ニ来る身へニ昔のよふニ身
よもえなおしゝくやろふと色々深切ニなさり今ではなニ
ひとつ不足もなくなつてハえんな菊さんの深切それニなぜ
おまへハ菊さんをきらふのぢや菊さんがおまへをいやといふさんなさ

る事ハ弟子自分の子のよふにおもふて万物も好ミ次第
様にやり我侭次第をさせなさるをなぜおまへの方から
ら物もいはず様へよふ子させるのがいやで見て居てまへく
させるぞふそできてめて鉄漿もつけさせほんとふ子こん
礼をさせて私もあんど志ていけれどアノ通り病にて計り
いる身ゆへ仕方がないからおばんさんお前にたのむとかも
つて咄子あげてよへ私も今日ハ是非気をつけふと思つて
居りましてお根ぜんぜふ志てこらよくのろふのト咄してあのおちハ給方なく嫁らをを

こちげへまず御さへ此事ハ急度いふなとおつしやいましたが云ふも中
ませんぐハおかまさきんが我侭のよふでござるふござい升から
中ますのおかまさ日のお噺しぐハ毎晩く麹町のおかさん
ご来らく姿子あのおかまさんをせめますときにてまつ
おばんさんの深切を思ふとおかまく丈婦まハならぬ
トおかまさがいびしいちぶ志ぐるをのこす咄しけれバ佃島おばんもきもを
つぶしそれより志ぐおかさまハ久しく内にいておかさんが宿を咄して暇く
身をまかせしよふすを咄せ志子今ではあるやしきのおかみ子あくのり夜四郎
お夫ハ父手もうけ裕と自分のりおかまさの方がうつてかわへおかまさと夫婦
手ならんと思ひいとまをくれし物なんと思ふ袖くるみ自分よりおかさんが
方のくもおりくおかまさをいじめる姿をみ見しをふかき子思つて居た往

の夏なれバあつくるしむとゆもあらぬよし逆上しけるハおらく
いよいよびまつくおまきが今のまよひなりんとおらくおばんといひあはせ
それとハなしにおまき子その噂を志てく逆せるならくハおまきの母親も
なきゆへたつね本町へ来りてく尋るよふにしてくおまきの世話をしてく元
るよふ中と藤次郎がたのみ迚へ付茂ハ本町に尋る又おばんハげいこをしてくるよ
ふぐもなく義理たがしくよく志んせつ世へ藤次郎も兄様のつくやさつ
ならり鶴井元へ金のりゆるくおばんが言つも附くハ行おまきをバ弟子ちめ
まり之一すよそへ行ゆもおまき子そふいつくもくらいで大るさまれども
おまきハ藤次郎をやぶりとそのく内に居ぬよふ子志てくおまきハ藤次郎と
一所に居られも夏のよふな思ひ寐ても寐てもうなされて只いちくやうつら
くと寐てゐるそのり居ち ゆゑおらくハそばへ来て ばん「おまきやおまきや ばん「おまきさんなせそんなお
子寐てゐぞのりお出なさるへたまくまへすゞの気にてちつ
と此池までもなきいな まき「ヲヤおばんさんよくお出だねお梶

がいないから謙子不自由ぐなりませんよコレつぢや忠孝
まそふいつく何ぞ此池までを志やよ ばん「モシおまきさんとんぶ
噺しの爲ますよ まき「どんなお噺しだへ ばん「アノ子むこの旦那の
ちつとの内お妾すらくおかきと挍ふしくおさんといふ女ハ
今でハあるお屋敷のお妾子あがつてそふぶこのその敷居
おとんぶいひ男でおそろしく惚られるとき まき「ほんまく
それでハモウ藤次郎さんの夏ハ手にれてく志まひますか
ろふね ばん「手にかれてそこでのちつとも思ひ出しも志ないのさ

そうしけんでハ大そうな所をしく取るといふ事であり
ますまい（まき）それハ情ない様へ（姉）なんのお亦をおそろしく思
めさそふぶからハ是れハ膳てうくならなほよ乞食子でも
なればいゝはひ（まき）お姉さんハどんぞ事をおつしやるよとも
乞食子でもなつくごらん様が世話さんを喰らしむたふ
からぞふぞ仕合のよいよふ子志さいよ（姉）なんの勝らしいどんな
子なつくもよひのさい貝羽のなき通うしこの目二ハあるまひ
しどんな子娘さんでも道ならぬ事ハおそきハ志ないから

かまふ事ハちつともないそれハそふとおまきさんいつ迄も
娘のよふにしてお出様ずきでとも鉄漿でもつけて新造
さんらしくおなり様ハせなへ（おそ）そふさいつ迄そふしてもいられ
めのふへ（姉）さよふさいやだのおふざのと我侭な事をこのおや
やくもせんくい貝羽ごのあるいぐへ（おそ）サアくおおんぎこのまゝ
まつてそれぶいご是れしがいくらそふいつても味ぬならおまへそふ
いつくよく世話を思ひおつまによトいふ所へ安次郎ハ泣り段来りなぐずおくあさいへおまき
けふハぞふぞ一さつきよく様子く聞てたまつて行つぶ

麹町でもおつのさんがよくいつてくれろとおつしやつてお
娵んよく来なさつてくれ麹町から何のいろ〳〵なものをお
こしなさつてふどよこのろふ小僧にへおくこい　子僧「ハイ」ト
おもてへ出て来る　夜「サアおかゝさんもおまへさんもちつと来なへなお娵ん世話と
しくおまへさんたへさせな　娵「ヲヤ山ぐの黒だねお客に世話を
させてくおまへさんもいつ迄も子供のようでもつまらないもので
ありますよちつと御新造さん気どりにおなり遊ばせ　夜「いつてお
お娵んといふお伴さんがあくのゝ娘の年よりもよくのろふよト　深く

娵「ほんにおまへおぼこ娘を持て居ると世話がやけるト　それよりよく
あけてもくれてもいゝやす　娵「御新造さん私ハ薬師様へ参りたいがあなた
お出遊ばさぬか　夜「ほんに参りませうト　おかゝお娵ハおのゝと子僧をつれて茅場町の薬師様へ
参るといふて内を出てさつそく堀町の芝居へ行きて小僧ハ先へかへれと云つけるゆへ小僧ハさつそく国へかへり　小僧「旦那様
亀井戸の御新造さまとお娵さんも為渡道よりこのある
からさつそく亀井戸へおこんなさいませうそふこちらへハお
より遊ばしませんとおつしやいました　夜「そふその大方芝居だ
ろふ伯母さんもながいきでのふおまへさん　娵「さよふでござい

ます子どものないせゐくございませぬ（女）おめへもみんなくハつ
ゆへくぢにそのへ（まさ）ハイ立へ（女）ナゼそんなにぬさいろくがのりいるのだ
（まさ）ぬさぎハいたしませんがいつそお気の毒でなりませぬ（女）何
がそんなに気の毒だへ（まさ）どふもこんなにお世話になりますの
（女）マア亭主をいな本店の事なりましくおめへた女房
にまれバ杉の事ハまあずすへおのゆへハ志様へそんなに他人
がましく気の毒がらずとも早く病気をよくしてくげん
ぬくでも志なせへと送り子どものよふにかくしと志てどふ

せるのでたゞしお亭と夫婦になるどのいやの（まさ）ハイ立へ（女）やで
なけれバちつともきくせるどのいへ（まさ）どふもお嬢さんの前が
どうそお気の毒でございますよあんなによくしてください
ます様でふも見るふございます（女）そんなに気づつのいやます
こもいふまやア様へのお嬢んを様ふくしまふといふでハなし
お嬢んもおとなしくしてくさへいれバ一生不自由ハさせなひ
からちつとも気づつのひをしなさんな（まさ）ハイ誠にどふしてあん
な深切な人があるものかと思ふよふくございます様へ

友「そのくせ意地つぱりでむこふ見ずまたそこで酢でも酒で
もいゝの様へ志ゃのしおあゝのよふなけつこふな人ハ不覚でござる まき「私ハ
志ん実のお姉さん同様のよふに思ひますよ 友「それでこそありがたい
めんなのよく志なせへ それハそふと当座いつく事ることろ
おまへの伯母さんハ箱根お梶もいゝ様へからあなたに志よふ まき「お
出掛なしませ 友「まアあんまりいつでもよろひとぞんじまする
だろふが今でもこふいふんなし志んぱいでぎんだら苦労になるしけふハ
よしませう時分おまへさん麹町でそふおつしやつてござのおまき

いまでハ志んぱいでござるこの早く縁組をつけさせなせへ いや
迚も居られもふろくのよふでござるひらひらとおつかさんがなんでも
さいきなおもをいゝつくやそふとおつしやつて日をみて麹
町へもそふいつてやるがのいゝ まき「それでもぞふもおかしいよふで
ござりますよ 友「なんのおかしい事があるものかモウ目が廻るそ
ふこちつとこたへてもあさんなせへ ト其身も思を持ちこたへあそびなのろんでいる
そばにおまきハそこのくおかさんがよなく案事て来てせめるけれどもおめんが聞して若へ
居るもの兎も角くおあんじ申て居られてもおめんげ出し友次郎
のみハすこしも思はず今でハおきな身になりしとつかしいものも落付こと
より友次郎に話ぬ梅ほまでなて居る事なれバ今ニツ三ツに居るるのられし

きく子は気も晴やらぬ冬の月ふけ行まゝに夜あらしの身に志みぐゝ夜
次郎もおまきの浮切お姆さんの謎いふたをそれと立け様子もなかりけり
つけておお姆さんよりおまきのあどけなく深実のあるの子
ひとしれぬぐるも男女の心ぶぎん宿ますおつとひかりく 夜〽コレおまきや
何だしらく振るモウ寐よふおめへハまだ寐ないの まき〽ハイあなた
おなりませんか 夜〽アヽモウ寐や志やう まき〽そんならお寐巻をとり
くませんか 夜〽マアおめへ先へ寐なせへ まき〽それだハごふもおちつお
あるまます 夜〽何のきを急せずともいゝ支度を又夜中に起し
むごろふから先へ寐なせへメアハいゝそのよふ子くるしまない
よふごろけのふ まき〽ハイ代々ハあんまりくる夜ないよふでござい

ますよ 夜〽ごふしくのごいろふあんなよふなさるのがあん
まり気のおもいくごちつと気を丈夫持て寐てゐ
なせへ まき〽ハイさよふならごめんなさいましお先へぬせうます
ト織嬢よふト無地の縞の寐巻縞縮緬の小袖をきて此夜雨の様まき
常をメさき二寐る志ずぐくなると何のかわりさもなし
げまうなされる也 夜次郎ハ 夜〽コイくおまきく ト起こし薬をあたへ
きもちつかれお まき〽お来て る子おまきハ起身ら
こちらりく抱もゝすこしも也 菓子湯をのみく まき〽アヽ嬉しうござりまつ
の手せ色ことお抱き子やら正気つき目をひらき
た 夜〽何のぞんな事こゝらいのだ嬉しく咲せなせへ トこれはいま さらこふとも
いはれずまつとやも様をいふ 夜〽コレおまきや毎晩くそふ苦しむ
める夜次郎ハなだらくあんじく

とふハどふも合点のいかぬ
様へ何ぞ見つい祭つて夏
でも見るのゝへけマア汗の出
た夏ハサアくきとめぐも
きこのつるおいて何も見つてす
かくす夏ハないぞんなこと
夏ご覧しなせへトいふて中形縮緬の
のおふすまろうい小袖その本目ずり
のぐくおくの小袖をきくさせ色く

と深切にいはれる程おまへさんが工夫なこち
から申さずにいたら見るのふと是非なく
夜なくおまへんの事にて若しまするよりお座
けれバ夜次郎ハ顔をくつくおうぶり
夜
なる程おめへも子供のよふぞ
あんまり亭のちいさいのら気で
気をなやむのハ鞄付に振々時
の事を思ひ出すらくさし又なんの
つけするやうなおきんの何おめへを
恨むね物の恨んくよけ事ハされ

このおゆんをうらむまいぞいモウくそんな事毎晩く苦しむ
ならバ今夜からハ家へ一ッ所ニ寐なせへおれがそばニ寐
て居るのならちつとも云ひ事ハ無へと思つてサアく家
へまいつて寐て見なせへうちなされハ忘ないト いゝ直れて おまさもおゆんの匿
しといひ夜次郎がいひし事を聞てよくく思へハなるほど能そうらふ事もあ
ろふ家の事なりんとそれより気をおちつけ夜次郎の云へハ一所ニ
寐れバおきんも未だ文句もいふ事もなけれバおまさもいつの程よりの病
ひもなおり夜次郎も女房らいもやめおまさおゆんもてつあいしなかのむつま
しくおまさも日がらをえんでまへ猫子なり麹町の夫婦も大よろこびまて
幾く身上も良なりし おまき夜次郎のなかのよき事謀子を雪夫夫婦の
よろこびのよなく家門陰陽相合せる附ハ子の生れるなるひまてあれ
ども おゆんハあまたの男子をまうけし事也夜次郎ニあこされてもまゐる

三年にならしども いまだ子も出来ず居るにおまきハよふくけふる夜次郎
と夫婦になれども たがいの心をしるやぱどらハこゝろよく出来ぬ月
青楼あ好む身となりしのバ夜次郎大よろこび家中三十にもなる也 近
も年の気になりてもさてまだ子の出来るのをよろこぶ事大かた
ならず麹町でもらひ孫の出来ると聞て両親のよろこびいふもさらなり
おらくハひとり兄いの事なればよろこんでおゆんにもまいりけるハおよ
ろこびあるく子安がいとめのくちく幸ゆだの色々世話をして程なく出
る月に玉のごとき男子出生しけるバ夜次郎をはじめ家内のよろこび
両親もこおりく未だくおゆんにもあひちのつきにまなり又おゆんハ自分の子ハ跡
しん兄なくおまきが腹より出生したる子なれバ外の者に手もつけ
させずよるひるとなくちはくをしらく生れたる子を大切にする也夜次
郎おまきハ子及ばれ麹町の両親も大よろこび流の里にあだちし女まへ
まれなる良女なりとそれより亀井戸に川流りく本町の内にづきし奥
の方へ普請をなりしころおゆんの新屋とさだめ朝夕ろくうつるひまらく
おまきとハ誠の兄弟のごとく生れし子をおゆんにあやかるやうにとらく文次
郎と名付おゆんハまたにおぎんと名をあつらめ夫婦兄弟中むつまじく世乃の

はあそのまなりけれバおまきも文次に心ごゝちまや去年もこれ文次郎も
めぐらすになりゆく。ころ〳〵とうらぶれてゝちく〳〵も淋しく悲しくなりゆきし
しかし大切におやなおろそかにてとゝのひ悲しくおまきハ十六さこしもなし。まず文次郎
おまきよりハおぎんが詞をおひけれバおぎんも実の子のごとくそだてける
はまおい〳〵おまきことごとくりたくなくぬ身となりけれバおぎんの方へ文次郎を
引取りてふあいしけるが、けふハおぎんが新町谷へ遊参の心づけに行とて
支度をし、おまきの方へ文次郎をつれゆく。せのんと乳母をよび　ぎん「コレ文さんや　ぼアけふハ子のさん
へいつもの来るまに又だつて（ト抱とりゆく）　ぎん「おぐアや留主に何も
たべさせなさんなよサア〳〵おでアの所へおいでよ　うば「ヨヤ〳〵おいや
かへてふもおぎんさま乳におとのりおなごゝあそばし〳〵サアちつと
又おとつさんへ来りましやうサアだつこ抱ぜせどふでもおいやかへ

ぎん「ヨヤ〳〵モウおぎんさんにおなりだらちつとおとなしく
おなりよサアおつのさんの所へおいでおいやかへ　乳母「とつ〳〵　ぎん「サア〳〵
此新造さんちつとだつこ抱ぜせヨヤどふぞもおいやかへそれ
ならなら遊だつこしく行ましやう且那の新造さんさよふ
おつゝいつゝ来りますまき「ヨヤそんならお静によおかごをこ云付
且那のつれを襟へ且那　夜「そふサよつれどもまゝせぞくりまいかご
までも気ゝく来るぞのおひ　ぎん「此顔ぐけに来るに駕籠でハ
向体ない此新造さんおひへ抱いますなよ何ぐらいつそ苦労

ぐなりませんよ坊さんを跡へのこしてくよそへ行のハせんす
孫るそらハなりません〽夜そんなら連ていきなせへ〽ぎんアイサ連て
行ふございますがあんまりきをくらしいから今度鍋ん吉
さ母へ行附手連れやつて行ましやうトやつての支まておさ
すまれてもやゞくといつて壽ぎんがだのるを出處
そだまつて孫る〽まき姉ん坊ハいつて憎いよそれしまいちつまだら
ないよ〽夜おめへがのさつぱりすきで孫へとんだらよ手傳極蜜
おそのハ孫へおれまいだのるよトいつて手をいぶせとかぬりをぬらく
おぎん子たこのゞつく孫る出へたのゝぬよ

夜次郎ハ根を立てあてまを娘つま孫をとせる手子おぎんハ根を立て〽まきそれ
夜次郎がの身をむごくたつてさらへすま子おまきハおのしがのりてく
くおとつさんが大きくちがつたウヴふぞおぎんさんも不く
一人女の子が出来れハいつそ孫自分の根から生まれないで
さへあんなに可愛がつてよそへ出處るからおだから自分
の根から生まれてさへさぞうつるだらうが孫へ〽ぎんヲヤく此新
造さんもそんな支をおつしやる礙い私の復からうんでこそ
しさこのうまいのとよふのおそのでございますこの文さんハ前の世
まハ私とゝこでもあつてそくでやるせのない程可愛よサア

くおそくなるから早く参てまいりましやうト抱なが
ら出て行おまきも見世迄送り出　まき「忠ハ番頭や手代女中
むこのりてぐ道でのかづつのひたらゝだれぞつけやらくやつてくや
忠「ハイく長七をつれて参りませふトそれより手代をつれておぎ
ん出て行おまきも跡を見送りおぎんの深切を洞せ
こぼしてくらうまとしゐるも理なり

第拾壹回

傾城の賢なるハこの柳の角と糊それよりも賢なるハ

流石ハまれなるおぎんなりおまきハつくぐ思ふにつけ
姉し涙をこぼしつゝ奥へ来り友次郎に向ひ　まき「貝助へおぎ
んさんのよふな心いきな人ハありませんよ私ハいつそ気の毒
なよふでございますよ　友「ナゼ　まき「それでもどふも　友「どふした
だへ　まき「どふも私ハむごのりこんな子ハ手代の出来てぎんさん
ハ出来ませんそのを　友「それハおぎんハ吉原の子芸者をし
て居た時いろくな人と交りしたからして子ハ出来ねへ　モウ
さうなり色気ハ絶への　まき「ナニ十二三年もなりもおきくぬ

そのを〳（夜）女の七三四ハ男の四千位なそので〳（まき）そんなら私ハモ
ウ三千位でございますね〳（夜）そふせそれぐらゐ今迄のよふ子
氣づよい事をいつてハなりませんね〳（まき）ぜへ何も氣づよひ事をいひハ
いたしませんそのを〳（夜）いひ旦那へ事のみそのの無暗くおぎんの
所へいつて腐ろくといふでハねへの〳（まき）それハ又左迄でこふて
ございますあんな子おぎんさんの私を思つて義理をたて
揃ひてあなたを私の所へ来のりお客やおふ子なさつて迄も
を私もごふもだまつて居られませんそれ子おぎんさんもハ

そふりも女子の出来ず何でこの人の前でも氣の毒でおり
ません〳（夜）何の女房の子を産ます人の前へ氣兼をさせるも
おつひそんな事をかこつけてモウ大きに秋風だろう〳（まき）何の
マア私のあなたを秋風で何のといふ事ハございませんよ
それハそふと麹町へお出掛ですでハございませんか〳（夜）けふハ西
きやすめへおぎんハ張ず因子張て久しぶりて会をうけや
しやうまつておつけ四谷のお安産のおとやのましようて
なおの薬師で旦那へ麹町からお二人してお出なすつて世話

をやくは亀井戸の伯母さんが世話をやくし内のおかみア
さんハ人一倍世話をやくから今の内がのり楽しさぞ子
供も庭の梅のやうにでも夏悪相のよふな子生れるといふが
あの若いこを見ると可愛そふであのくらべはいやられ
袖へマア〱炭ぐもつけて〱んかせへそんな子さつて汁
まいると毒ぶらちつとすらきなせへ下女婦の守へ私
さのいらぬ羽帯薬揃抜さへ芍薬をさて濃茶
の後御さぶきても大よふ子かまきを相手子薬をたて

れとくらさずしと永き日も黄昏近く格子先も見世
の人に夜食の支度せ乳母ハ文殿御をだいてまことすた
まりし格子のそく小玉をいゝながら来れバおまきハ見るより
「まき「ぎアやさぶ〳〵このぢゝんなんぞこの「うば「御坊さんがおむづかし〳〵
てなりませんへ「まき「夜へ出てもぶりハ志様への「うば「イヤ立そふでもござい
ませんおぎんさんのお部屋へおつれやてまいりますと来ま
お泣やさ抱がしますらおまちやとそこらをはらん抱がし
てまておむづかり抱がしますトいふて二人こまりきつて
居る所へおぎんハ走つてくる来り「ぎん「忠吉さん今らへり
また文さんハござふ〳〵の「忠「何ぞこのおんむづかしこまつて居
ます〳〵「ぎん「ござふ〳〵のハ文さんや〳〵ト呼ながら奥へ来る
と夢を呼志りてくらまして「がつく泣やむ西念蔵次郎もお
まきもあきれ顔〳〵「まき「モウあきれてまずよモシ可笑そふで
ござりいます様へおぎんさんお柔郎おまそつてろふ過や湯ハ
上つているだらふの「うば「ハイ〳〵よく上つておりますよおぎんさん
おやりなさいましこの「ぎん「アイ〳〵サア文さんおまへをあげま

しやうと風車をやるとはてぐすだれかくもなれぬ思へ花嫁
むきてのつる事もなくず抱ながら自分の部屋へ引出へおま
さきらく世話をしろくいともつまじき二人が中夜次郎ハ
さも嬉しそふにおぐま へ今夜ハおぎんの所へ泊や
ちやらおまきに何ぞいひ付なせへ まき へハイ乳母や文がらを
たましくおぎんさんをお湯に入ましたいそのゞ うば へぶむ
おまなれ粧がしませんへ まき へ様子こまつてそのゞソウトいふ所へ
おぎんハ弟卯ともいとわずなずむ手志てのひさも嬉し

そふす下もどり文次郎が座のをだきながら奥へ
つまてく来る ぎん へ皆さく此新造さん樹く おか様んねおや
お床を敷くくんな まき へこれハおがふくびまてなりす
又だのつく座にそふさいさつきハ様子且那も手でても
ぶ志よふと思ひました ぎん へ[illegible]でも次くあんじくそれでも
久りす高後糧さ様へおま様やらく文さんの座の出ない
よふす此歳げをしろくそれからはてぐす高部屋ぐえんお
よおまんまをたべさせる内もこうちへ[illegible]の来るく

いるよふでありましたよ ぼんに文がらハおまへさんのおちの
へやどるのだろうがあんなに私の身を深切に世話をして
おきつくらる遠へ〳〵私のおなさの出来まするふへ十二廿
ゆるしハモウ日和もいらない文さんぞそのりこの三日よト泪
のみでまぐに寐ようくそれより湯にもいり酒を呑む
のとたきのけ されバ諺に老おバ不定とハいへとまぎれもなしま
るまこハちり〳〵行きのふのことどりハけふのちりさためなき世
のならいのやさまハかぎんいいとけなき頃より柳街花巷

まそぐちり〳〵酒がらになりく〳〵いやな酒も無理呑に
夜をふの親ひ酒を呑むにも身の者でハいのおいア
おばんをよぶといふる位の大酒にて名男よりも酒の悪し
ひといふいやらなき生れなりしがらく年あまりのそのおその子
今益酒節にかこまれても実合酒の上むるなく年ぬ
幼年をつゐひし出にやけるも雑用屋より出る夜ハ父
く幼よく大酒をのみて深更におよびて外しけるおいので
せんやあつと一声さけび血をはく事およびたゞしく親と

見るより夜次郎ハいそぎおよびておまきハ一倍肝をつぶし家内の男女をおこし、お梶を早く呼でや、忠蔵もこいそれお医者さまをよべと言を申へとりいそぎ下女の大さわぎ。おまきハこのよふなる躰をいとゞしくおぎんを抱て一膝も衣も血だらけになるのもかまはず身を抱しめいる夜次郎もそばよりうろうろ、（夜）コレコレおぎんおぎん、気をたしかに持やせ、（まき）おぎんさんおぎんさん、ト立さわげど、いよいよ血ハとまらず出るゆへ、手汗をにぎるむこのりず大勢勤ず寐ていける文次郎ハ

目をさまし泣出しけるにぞ夜次郎おまきも病人のそばでやかましいから寺へでも連て行のよびといふ声の聞へてやくるしき息の下よりも、（ぎん）文さん宮へ、トいふ声を子、（夜）せがれかへつてあしくよくなつてから呼びなせへ。（ぎん）イヽ文あさ延ハ生きるいハいゝりませんから、此世のいとまごひぞつれてまで抱せてくださいまし、とても生られませんトいふも苦しいきづかひおまきハ始終涙ぐみ、（まき）エヽモウそんな事も言ずおいでござりますから乳母や宮へ早く連て来や、おぎんさん目前

も実子お出だよ病を丈夫にしてお出とおもしく女抱さる
内医者も来りて薬を呑ませけれどもいまだ血ハとまらず
乳母ハ文次郎をおぎんのそばへつれて来ると漸く血もすこ
しとまりければおぎんハおまさの膝へよりかゝりて萩次郎ま
文次郎をだけといふ内へいふなりに文次郎を抱とればおぎんハ
る手をさしのべて顔をなでたりさすつたり恙なさのうらさも
苦しげに（ぎん）「ぞふで文さんのかハりにおなりなさる迄生きていたいが
け振子でハ助るまいそしくこれから歳たりおまへさまの

出来ましても文さんを大切にお育なされてやさい
ませ麹町の大旦那さまより私がのいてきました金子や
その外着類手道具もこんどの取り私の葬の祝ハぎ
いませんから残らず文さんへお出づりや帰りおのでふでなぞ
がおましまする位ぐみますから不行着でも着物ハなきを
しくお着せやらくださいましまづい是ぐハみますすの旦那
の事ハそんなんもの残すもおしくもございませんがおも文さん
にその出来るのがの名おかしい江新造さんも今迄のようにけ

こうするこのりしくお出抱かずなへまつゝ旦那も今迄より
一ばい此彩遊さんをおいとしがつてあげてくださいまし折角
文さんさへ堅丈では家の跡をとり抱かせバ何事も
思ひ残せし事ハありませんよトくり返しくゝ文治郎が身を
とつくと看病もいとゞ心いらくに言ひおせて言葉さへ息
も絶えその中に文治郎ハさやくと夜治郎に抱起しておぎ
んが身をちいさな身で持あがつて森るを急ぎ夜治郎も哀
出をそゝふしおきまさハ始終泣入てせきあげて詞さへもい

でまでおぎんに向ひまへおぎんさんナゼそんな心細い事をおつしや
やるへ此住なとりく死ぬと思召ハ目出に似合ぬお気のよはい事
ぐるまするよお前が死よつとそれしきの事がありてハ私ハどふい
たしませうやく文坊もお主人計りをたよりまいらするものをそれお
気のよはい事をいはれてもどふぞよくなるように此薬りをお
あがりよ旦那文ぼうを乳母の西へつれて行ておぎんさんの
そばへお出抱かずしくどふぞよくなるやうにしてくださいまし仁立
旦那より私の息のある内ハどふぞ文さんをどこへもやらず

みちきやてやきいましぞふ
ぞ氣を変文字持てもらい
度本板をさせるようにしてな
今迄はついに一日世話情て
おいらは夏もなく手をまさい
の夏も自分の身まちて世話
をしてもらうことそこんな文
ぼくらは者も出来て深

よろこんでいるもなくこんな
急病麹町の両親も龍井
その伯母さんもおめでたいこそ
礼をいふめでたいの門のよろこ
びはおまきもよろこんで銚餞
いよいよ来は文次郎をば為
の子供もさせ此家をさせず
まぎつく楽みくやろふ

をとゝくらひもなくけよふな急病のおこりもあんまり
酒のみてお急だらふぞふぞモウ一度よくしてやりたいおだの
のふおまき（ます）へどふぞ志てへハございませんのねへ旦那ござかいたし
たらよふございます志やうほんにけふ目渡村屋から貰ひまして
経済さるの明後日のございます志ふらけト持て来て呑せる
やらヤレそこの医者をよべの娘の門へ代来をたてるのといふ
内を夜もあけあなうち麹町の長坂卯ぐの母親亀井戸の
向両おやくも物なくぬおぎんが大病ゆへ人をやりしうち中より早速

手欠つけ中の者へとりあつからへ（おかぢ）ても大変な事ぐのおぎん
ハどふぞへ今手血ハとまらねへのの（おかぢ）ハイちつとハとまりましてそう
でございますのモウよくハなるまいとお医者さるるもおつしやいまさ
ト内おかハづゞ医者抔へ（扑）ハイヤこ医ハ亀井戸の新造さるの若者方でござ
いますへ（おかぢ）ハイ只今まいりましてのモウ叶ひますまいの（扑）左様でご
ざりて多年の大酒ぐ内のことごく腐つておるやうなあんでござ
りますのらつそても此年頃ハむつのしふございますへ（おかぢ）私ハモウ
見るのいどらしくつてそへまいるのいやでございますそれでも

又ちよつとしたものゝ事があろう時ハ生がいお閉すあい
料へも残念ぶつト泣ながらおぎんが部屋へいつて見れバ
大勢が来てまいつて泣ている様子あつたのも釈迦の涅槃
像のごとく一在ただ悲しくしく目もあてられぬありさま
す伯母ハおぎんがそばへ行泪を隠しながらハおぎんやなげいて
よぶたへちつとハひよふ之トいふ声ほのかにきこへてや目を
ぱつちりとあいて物いひたげなる顔をせず両眼よりはら
くと泪をこぼすばかりにて物もいわれぬありさまに伯

母ハ猶いたわしくコレおぎんや迚も叶ハまいがおまへの身から
薬を呑しくれんないか何ぞ無理でもおまへから持てまゐらさい
「アイくト言ふも泣ながら聞ごとんさその儘しふら鍋の中
物よい迄てらま持て来て伯母の手へ渡せバ伯母ハ無理
をかしなかけ白湯をそへておぎんのそばへすゝまよりおぎ
ん是を呑なさろとすゝむるとよくなるようしく目にのら
後ハ是をすてる後悔さ母や金と光さ母をおのでなきいト言へ
ども迚もよくなりぬを承知してやうやくりをなつて何ぞも

呑ぬにこまりまして伯母ハ次の間へ来り萬次郎に向ひなぶ
も逃もあの様子でハよくハあるまいよあの子のよふな深切な
人といふもの〳〵今の苦難をまいらさずのしてあるいてもみる
こんじやア様へおまきの語のも無理じやアないよお前に私
お一生の彩こだらなぎんをあゝためて私の娘にしておまき
の姉ぶぜんに志いよそう志たら文ぼうをあんなに可愛がの
つくこのら亡後もあの子のものら回向させるにも心易も無
になら無いぐよのそう是を破り届くくんな夜〳〵それハモウあない

たゞのおつしやらずともあの深切なおぎんが志ぶハお礼と
ト思つておまつて内に今度の急変こそもあの様子でハ
叶ひますまいから其ふいたしてくださればゞ私もそつとは嬉し
うござります志の病人にそんな事ハ決してくいはれね（よト
又おぎんのそばへ行くて見るに不思議や両眼を見ひらきいせ
のいとまごひとや志げ〳〵と萬次郎おまきも文次郎の顔を見
つめゝ泪を落させと頻の降るのでゝ抱いひたげに見るれ
どもいごろ〳〵といふのどの音のするのみにて声もいでぬ様子

人〴〵あはれをもよふし顔見合せ詞なし伯母ハ枕のそばに
より〳〵おぎんや論の事ハ何事もおまへに案じなさんなおめへの
いふ事をきゝて文坊を家の内の跡とりに志てくれろおめへをバあの子の
母親のつもりにさせるのらそんな事に名を残せと祈ふへいつの道
孫へとゞふのら哀しくさうちの事を思ハずにお題目を唱へ
なせへそれ〴〵おめへの継親達の方へも孝さんが一生くされる
よふに手商を志てやんなさるつもりに今あつちで能お法
をきかめく来たら迷ハずに一念に極の内さ母をおのこな

よと耳のきこへおつ付くいゝへバさも嬉しそふにまつ有と笑つ
たなり目を閉てはや出のいきそのりかよふ枕にて店の者も
ちぢめ壺の下女ちもしこみにいてる追日坂のらいるく思ハぬか
ぎんの事なれバ皆〴〵涙ぐミ（下女おむめ）モシおぎんさんハモウ息をおしなさる
なさつたこの（せ）へアイ今モウひく〳〵とお出なさるとけ本にそふ
志やアないこの孫へ（なあ）ぞふも志てこの孫へのふほんにお医者さまや
神仏さまのお力をもいつの孫へるこののふ（せ）さぞ良いさまハおかみ
志のろふよあんなうつくしい氣だてのいゝお方をころす事で

あゝどんな気持だらうへ（むすこ）ヱヽしやア母親さまより　おきんさん
のきハどふだらう母親さまのよふないゝ男の亭主を殺し
て死んでゆくハさぞやくやみぞこのなさいのふトヤすゞの
噂このせの身代どのこらずりやうくヽ（惣八）コレ金之助かゝも酒のすき
だがモウおきんさんをみるにつけてもあんまりさぞくさ神（よふ）
まさるどのいゝひぜ十六や七であんな真ッ血をたいて死ぬといふも
こんな酒でぞろふのくすつくやぶれこのぞこそぐゞ（金之助）イヤあの
人なんぞハちいさい時から吉原にいて苦労をしてきたんだから

酒ぞのりでもなく気短を志てのだのたまりくて病気と
なつてのぐあふと誰一人泣ぬものなきこそ道理なり誠や
老少不定死ぬの物ハおくれさきだつ人の身より怪（あや）しの山賤（やまがつ）ま
歩む道誰がのがるべきといふもの花の盛りの若者もついに死ぬ
風さえもまつてく二十七を一期として黄泉（きなう）（いづこ）に立つることこそあはれ
ちり行あきのころかぜひくと吉原なる女郎の数々けふの上
あれもこのおきいて浮世のありさまなりの息子ハ皆ゝ友次郎か
まさい分縁家内のなげき大かたならぬ有様を

くり返し〳〵いつくはる也へおまきハやそんなに泣てもモウ志かたなく
お袖へ又おかへの身も大事がらモウ〳〵あきらめるがいゝおぎんの
枕辺にあつどひ夜次郎も伯母なら〳〵がいひし中を両親へも世
せバ両親もおぎんの深切をかなぐほめ〳〵いる〳〵ひ也へ行墓も
おまきの父母この世にはなるがのよひとそれよりおまきの婦のそり
あつのひまし〳〵文次郎を一ぜんの志よふこゝろとさだめおぎんが
墓所を別に志つらへ〳〵このい名を貞松院知松大姉と返
見なまぐつけ知死弱まつまの愛別離苦よそのみえる

目もあてられなり夜次郎ハおぎんがのじくらしやせ〳〵
ひとの見んきこの〳〵もなき時にいひおきしとおりにそれ〳〵
にまかせゝ奥に寺もあらためゝ頼るいところものぞころにまの
せ〳〵文次郎に由ぎらせるつとりし〳〵それ〳〵葬その
こゝろがまへをぞ志たりけりおぎんハうまれ付貞義との也へ
にこそ世の人もちよつとしく友にも悪をとら〳〵若をさため
る中に也へなれバ女子と生れ〳〵そのハつねもづきハ色欲の
道なりつらくおぼしとのハをなく〳〵ぬ見んき志つとのかお

さかゆるものなり謙の心を守る時ハ行末も永く久しく
たとへ寿命なき身ハ早く終るとも末々の代迄もなかし
まことに直なるものなるべし花ハ根にかへれどもけふの日ハ又と
なき事能く心得べし此次冊の貞烈節女の貞義なる
事をよくよく女子たるものハ色欲に心をつゝしむべしさと
るべしく

教訓女今川巻之三　終